

Computer Report

Vol. 56 No. 4 4月号 (通巻 739号)

はじめの言葉

■中学校での進路指導に使われるデータが誤っていたことから、その指導結果に悲観した生徒が自殺した。悲劇である。指導に当たった担当教師は、ひたすらコンピュータで教えられたデータに従順だった。コンピュータはウソつかない、絶対的な信頼をおいていた(ようだ)。まさに今も残る「コンピュータ神話」の恐ろしさである。問題となった2年前のデータは、実は他の生徒に関わるもので、当該生徒とは無関係だったという。

■当該生徒は無関係で事実誤認のデータに基づく進路指導の結果、自殺におよんだ。事件後、当該中学校の校長は、押しかけるマスコミ陣の前に、担当教師をかばうように「全責任は私にある」と大見得を切って断言して見せた。果たしてこの校長、全責任をどうとる覚悟にあるのだろうか。生徒は死に至っている。校長および担任は、業務上過失致死罪に問われても仕方がないところだ。その認識、自覚を持った発言だったのだろうか。

■手軽な道具として活用されるようになったコンピュータ資源だが、改めてデータ管理の難しさを目の当たりに見せた事件である。PCに代表されるシステムリソース活用は多くのユーザーにとっても手慣れたものとなってきている。しかしその前提は、正しく正確なデータ活用環境が確保されていることだ。そのためには適切なデータ管理が実践されていなくてはならない。「古くて新しい問題はデータ管理だ」の鉄則を痛感する。

■軽々に「責任は私にある」を連発する政治家、経営者は多い。が、責任の何たるかを再確認しながら、コンピュータ活用の原点を考え直したい。マイナンバー制度についてもそうである。それに関わるデータ管理がどこまで厳密に実践されるかを思うと、背筋が寒くなる。運用された場合のメリットだけが喧伝されているが、それを裏打ちするデータ管理環境がなくては、大きな悲劇を生み出すリスクがあることを忘れてはならない。

■安全保障関連法が施行されたが、これについても、マイナンバー制度同様、政府の説明は不十分である。説明不十分は、マイナンバーの実行現場に様々な戸惑いや過ちを誘因する可能性がある。また防衛大学の卒業生による任官拒否が激増している事実から、安全保障現場でも、国民が理解しかねる状況が起こっているのではと疑わせる。とりわけ国防業務に携わる幹部候補生レベルでの戸惑いには、一層気持ちを悪くさせるものがある。

■国の政治も、安全保障も、マイナンバーも、教育問題も、多くを公的な機関に依存する問題である。民主主義国家の建前からすると、国民たる民が主(あるじ)である。が、現実的には、国民は常に客体的な立場で受け容れる側に立たされている。自分がどのような扱いを受けることになるのか、十分に知らされて然るべきである。綿密に説明されて然るべきである。口先だけの「責任論」ではなく、実のある責務を果たして欲しい。

■情報社会の要諦は、情報公開にある。いつ、どこで、だれが、何を、どうしようとしているのか、公的な立場にある機関/職員は、国民に、より迅速、正確に知らせる義務がある。そうした作業の過程で、関係者の正しいデータ管理能力/運用力は高まる。データそのものの精度が上がる。より多くの人を知ること、データに間違いがあれば是正され、さらに精度は高まる(はずだ)。誤認データによる悲劇は繰り返されてはならない。(藤見)